『源氏物語』の「薫り」

――平安時代の「練香」の基礎知識――

吉海　直人

〔要旨〕『源氏物語』の解釈に必要不可欠と思われる「練香」の薫り（嗅覚）について、十四の項目に分けてその基礎知識を論じ、そこから見えてくる薫りの特質や問題点に言及した。最大の問題点は、「練香」に関する同時代の資料が少なすぎることである。たいていは後世の資料を使って平安時代の香を説明していることを明らかにした。それは室町時代以降に発展した香道も同様である。香道では香木をそのまま焚く「組香」が主流なので、香道の知識で『源氏物語』を解釈することには無理がある。当然、「源氏香」も名ばかりで、『源氏物語』とは無縁の意匠であった。

目　次

第一部　一、『源氏物語』の「薫り」
二、「練香（ねりこう）」の成立―平安時代の「香」―
三、『源氏物語』の「追風（おいかぜ）」―紫式部による薫りのみやび化―
四、『源氏物語』の「空薫物（そらたきもの）」―贅沢な貴族の気遣い―
五、『源氏物語』の「移り香（が）」―感染する薫り―
六、『源氏物語』の「かうばし」
七、嗅覚の「なつかし」
第三部　八、薫物の縁語―籠・火取り・焦がる・焚く・染む・くゆる―
九、平中と本院侍従の話に登場する「黒方」
十、土中に埋められた「練香」
第四部　十一、『源氏物語』梅枝巻の「薫物（たきもの）合せ」―王者の

遊び―

十二、季節の「薫物」の謎

十三、「合せ薫物」について

十四、「梅花香」の和歌

第一部

一、『源氏物語』の「薫り」

古典文学、中でも『源氏物語』を深く読むためには、単に古典文法を会得するだけでなく、古典の教養を広く身につけることが求められる。さらには視覚以外の聴覚・嗅覚を磨くことも大事である。この場合の聴覚や嗅覚は、必ずしも現実の感覚ではなく、物語の本文を読む上でのことである。物語の本文を読みながら、そこに描かれている聴覚情報や嗅覚情報を見逃さずに読み取ることができれば、それだけで物語の読みが深まる。

ここでは特に嗅覚について考えてみたい。ただし嗅覚といっても、いい匂い（プラス）もあればいやな匂い（マイナス）もある。『源氏物語』の最初の「香」は帚木巻の「雨夜の品定め」中の博士の娘が服用した「極熱の草薬」（にんにく）であった（桐壺巻に「香」の例はない）。プラスの嗅覚情報としては、自然の匂いとしての梅や藤・橘・藤袴などの植物（花）が物語の中に鏤（ちりば）められている。もちろん平安朝貴族文学では、自然の匂い以上に人工の薫りとしての香木・薫物の方がずっと重要である。「追風」「空薫物」「火取り」「移り香」「薫物合せ」など、『源氏物語』の中にはいろいろな「香」の薫りが鼻をくすぐっている（間違いなくキーワード）。

というより『源氏物語』の主要人物は、各自秘伝の「練香」（煉香）を調合し、自分だけの個性的な匂いを創作し、それを身に纏（まと）っている（衣服や小道具に染みこませている）。光源氏は光源氏だけの固有の匂いを発している。だからそれを聞き分ける（嗅ぎ分ける）能力があれば、嗅覚情報だけで人物の特定が容易にできるのである。

例えば空蟬巻で、光源氏は空蟬の寝所に忍び込むが、まんまと逃げられてしまう。というのも空蟬は闇の中で光源氏の匂いを察知したのである。逆に空蟬の寝ていた床には、空蟬の体臭（人香）が染み込んだ袿（うちき）が残っていた（それが「うつせみ」（空っぽ）の正体）。空蟬に逃げられた源氏は、その衣装を持ち帰り、密かに匂いを嗅いで空蟬を想起する。空蟬の匂い（汗も）

がしみ込んだ衣装は、空蝉の分身として機能しているのである（田山花袋の『蒲団（ふとん）』が想起される）。

若紫巻の光源氏など、着ている衣装から「香」の匂いが辺りに漂っていた。その光源氏が歩くことで、空気が攪乱されて衣装の匂いまで拡散される。それが「追風」である。その光源氏が幼い紫の上を抱きしめると、今度は紫の上の衣装に光源氏の匂いが移る。それが「移り香」である。多くの場合、「移り香」は男性の匂いが女性の衣装に移ることを指す。そのいい匂いを紫の上の父である兵部卿宮は嗅ぎ取るが、光源氏の匂いだということまではわからなかった。どうも兵部卿宮は嗅覚能力が劣るようだが、もしすぐれていたら、妹の藤壺と源氏の密通も察知できたはずである。

宇治十帖の主人公である薫と匂宮は、その名前からして嗅覚を象徴している。薫は出生の秘密（原罪）が背景にあってか、そもそも体臭に特異な薫りが含まれていた（「香」を食べていたのかもしれない）。だから薫の姿が見えなくても、匂いによって近くに薫がいるかどうかすぐわかった(1)。そんな薫でも、大事な時には体臭だけに頼らず、さらに衣装に「香」を焚き染めている。その相乗効果は半端ではなかった。

その薫が、匂宮の妻となった身重の中の君を抱きしめる。すると薫の強い匂いが中の君に移る。もちろん中の君は衣装（下着まで）を取り替えるが、それでも薫の匂いを消し去ることはできなかった(2)。帰宅した匂宮は、中の君から薫の匂いがするのを敏感に嗅ぎ取り、薫に抱かれたことを察する。このことが匂宮を浮舟に接近させる一因ともなっている。

それだけではない。薫をライバル視する匂宮は、鍛錬によって調合の名手になった。自らに薫のような体臭が備わっていないことにコンプレックスを抱いていたからである。ついに匂宮は、薫の匂いまで調合して出せるようになる。そもそも嗅覚というのは、視覚が使えない闇夜（月夜）に力を発揮する。その場合、声（聴覚）や匂い（嗅覚）によって相手が誰だか判断するしかない。その際、相手の匂いを作り出せたら、いとも簡単に相手になりすますことができる。

夜中に、匂宮が薫の匂いを身に纏って浮舟に接近したらどうなるだろうか。匂宮は薫の物真似までできるので、鼻の利かない女房たちなど簡単にだまされてしまう。ということで、匂宮はまんまと浮舟の寝所に侵入することができた(3)。宇治十帖には、物語展開に巧妙に嗅覚が取り入れられているのである。

要するに続編は、「嗅覚の物語」だったのだ。このことに気付くだけで、物語の面白さはたちまち倍増する。

二、「練香」の成立―平安時代の「香」―

現在「香道」という芸道が確立しているが、それは室町時代後期から始まったもので、平安時代に「香道」という言葉はなかったし、「組香・聞香」なども存在していなかった。要するに『源氏物語』の読みに、香道は通用しないのである。有名な「源氏香」にしても、「源氏」と冠されてはいても室町時代後期以降の産物でしかなかった(4)。

平安時代の薫物の主流は「練香」(煉香)であるから、まずその歴史を簡単にたどってみたい。もちろん「香」は、平安時代よりずっと前に日本に伝来していた。飛鳥時代(六世紀)には、仏に供える供香として、仏教とともに伝来したとされている。資料的には『日本書紀』推古三年(五九五年)四月条に、

沈水、淡路島に漂着れり。其の大きさ一囲なり。島人、沈水ということを知らずして、薪に交てて竈に焼く。その烟気遠く薫る。則ち異なりとして献る。(533頁)

と出ている。漂着した沈香の流木を燃やしたところ、煙がとても芳しかったので、朝廷に献上したとある(5)。「沈」というのは水に沈む木という意味で、香木の名称にもなっている。初めて「香」が焚かれたのは、同じく『日本書紀』皇極元年(六四二年)六月条の、

時に、蘇我大臣、手づから香鑪を執り、焼香きて発願す。(65頁)

である。これはやはり仏教の供香だった(葬儀の「焼香」もその一種)。

「香」の原料である沈香・白檀・丁子などの天然香木は、外国産で非常に高価だったので、裕福な貴族だけの嗜みだった(麝香は香木ではない)。平安時代は「練香」が一般的だが、それは奈良時代(七五四年)に日本にやってきた鑑真一行によって、薫物の製法や配合技術がもたらされてからだとされている。要するに日本の「練香」(煉香)は、鑑真から伝えられたものだったのだ。

また平安時代には、高価な香木の輸入が盛んに行われた。平安前中期頃、藤原冬嗣や源公忠らによって、梅花(春)・荷葉(夏)・菊香(秋)・落葉(冬)・侍従(秋冬)・黒方(冬もしくは無季)という季節ごとの「香」が考案されたことで、いわゆ

る六種香が成立した。そのため冬嗣を「練香」の創始者とする説もある。これを基本として、それぞれ数十種類の香木から独自に調合することで、自分だけの特別の配合を作り出した。具体的には、香木を鉄臼で粉末にし（抹香）、それらを微妙に配合し、蜂蜜や梅肉・甘葛などで練り固めて作る。配合には家の秘伝も生じた。その配合は、範兼著とされる『薫集類抄』（十二世紀中頃成立）の中に記されている。ただし『源氏物語』の成立から百五十年以上経過しているので、果たしてどこまで遡れるのかは疑問である。なにしろ『源氏物語』はフィクションなのだから、『源氏物語』に書いてあるからといって、それを証拠資料とすることは難しい。

こうして作った「練香」を、炭火でくゆらせることで「香」を焚いた。その焚き方は、線香のように直接火を付けるのではなく、香炉に灰を入れ、その灰に埋めた炭火の熱で間接的に焚いた。だから焦げたり白煙がもくもく出たりすることはない。水蒸気のようなものが出て、そこからあたりにいい薫りが漂う。「香」の効用としては、最初は邪気を払ったり浄めたりする宗教の小道具として用いられた。その後、仏教とは別に、心を寛がせる薬用効果（アロマセラピー）、あるいは西洋の香水と同じく体臭などの生活臭を隠す役割も担った（西洋との違いは湿度の違いといわれている）。それ以上に、貴族たちは積極的に「香」を部屋や衣装や髪に焚き染めることで、嗅覚的な美を追求していった。

衣装に焚き染めるやり方は、伏籠の中に「火取り」（香炉）を入れ、伏籠の上に衣装を被せて「香」を焚きこめた。それを「薫衣香」と称している。髪に「香」を付ける場合は、「香枕」という枕の中に香炉を入れ、それに頭を載せることで髪の毛に芳香を焚きこめた。また「空薫物」とは、誰もいない部屋の中で「香」を焚き、どこからともなくいい薫りが漂ってくるようにして、来客をもてなすことである。『枕草子』一九〇段「心にくきもの」にも、「薫物の香、いと心にくし」（332頁）とある。贅沢な貴族文化だといえる。

当初、仏教と一緒に日本に伝来した「香」は、いつしか仏教から離れ、平安貴族の生活に浸透する間に、「練香」として独自の進化を遂げていった。貴族の間でファッションとなったことで、『枕草子』や『源氏物語』において、生活描写の中に自然に取り入れられていったからである。それが鎌倉時代以降、武家の世の中になると「練香」は廃れ、香木そのものの「香」

が好まれるようになる(6)。それが香道へと発展していった。

なお現在、四月十八日が「お香の日」に制定されている。これは『日本書紀』の最初の記事が四月だったこと、それに「香」の字を分解すると「十十八十日」(最初の「ノ」は無視?)となることから決まったそうである。

第二部

三、『源氏物語』の「追風」

―紫式部による薫りのみやび化―

第二部では薫物のキーワードについてとりあげてみたい。まず「追風」について、これには三段階の意味の変遷があった。原初的な意味として、『古事記』や『日本書紀』などでは、海上の帆船を前へ進める順風のこととして記されている(『万葉集』に用例はない)。帆船には必須の実用的な風の意味だったのだ。

平安時代になっても同様で、『竹取物語』の用例、

船に乗りて、追風吹きて、四百余日になむ、まうで来にし。(33頁)

は、上代と同じく順風の意味で使われていた。『土佐日記』にも、

追風の吹きぬるときは行く船の帆手うちてこそうれしかりけれ(39頁)

と詠じられており、船旅における「追風」のありがたさが歌われている。もちろん平安京周辺に海はないが、『源氏物語』須磨巻では光源氏が船で須磨に下向しているので、

御舟に乗りたまひぬ。日長きころなれば、追風さへ添ひて、まだ申の刻ばかりに、かの浦に着きたまひぬ。(186頁)

と用いられている。船で移動する際に「追風」が吹くと、かなり早く目的地に到着することができる。

それに対して『伊勢集』には、

追風のわが宿にだに吹き来ずはゐながら空の花を見ましや(一一二番)

という歌がある。外から家に向かって吹いてくる風が、梅の花びらと薫りを運んでくるというのだから、用法が上代とは大きく様変わりしていることになる(誤用ともいえる)。ここで「追風」に、初めて嗅覚的要素が付加されたのである。また『恵慶法師集』の、

追風のこしげき梅の原行けば妹が袂の移り香ぞする

（二一〇番）

もあげられる。『万葉集』でほとんど問題にされていなかった「香り」が、平安時代になってようやく重要なモチーフとして歌に詠まれるようになったのである。ただし、まだ梅を中心とした自然の花が主流で、人工的な「香」は登場していない。

それが『源氏物語』になると、一気に盛り上がっている。たとえば若紫巻に、

君の御追風いとことなれば、内の人々も心づかひすべかめり。

（211頁）

とあって、光源氏の衣装に焚き染められた「香」が、光源氏が歩くわずかな空気の動きによって、あたりにいい薫りを漂わせるというみやびなものとして用いられている。これなど『伊勢集』からさらに進化した新しい用法なので、当時の読者も驚いたことだろう。ということで、『源氏物語』の特殊表現、あるいは紫式部が「追風」に新たな意味・用法を付与したといっても過言ではあるまい。

それに敏感に反応したのが『徒然草』だった。四十四段に、

寝殿より御堂の廊にかよふ女房の追風用意など、人目なき山里ともいはず、心づかひしたり。

（116頁）

と、「追風用意」という言葉が用いられている。ありきたりの言葉のように思われるかもしれないが、『徒然草』以外に用例が認められないので、これは兼好法師が『源氏物語』から考案した造語だと考えたい。来客がある時だけではなく、「人目なき山里」でもそうして用意していることが嗜みとして評価されている。「追風」の効果を知った上で、普段から衣装に「香」を焚き染めていたことが察せられる。さらに、

夜寒の風にさそはれくる空だきものの匂ひも、身にしむ心地す。

（116頁）

とあって、若紫巻を踏まえて描かれていることがわかる(7)。

『源氏物語』にはこういった嗅覚にかかわる、しかも人工的な「追風」が七例も用いられているので、積極的に嗅覚を物語展開に取り込んでいるといえる。こうして「追風」は、自然の順風から『源氏物語』において人工的なみやびへと変身・昇華していったのである。と同時に、人工的な「香」が文学に描かれるようになった。

四、『源氏物語』の「空薫物（そらだきもの）」
―贅沢な貴族の気遣い―

『徒然草』に「空薫物」が出ていたが、これは『うつほ物語』国譲中巻に、

例の空薫物などして参りたまふ。（184頁）

とあるのが初出とされている（上代に用例は認められない）。その意味を『日本国語大辞典』で調べてみると、

来客のときなどに、どこからともなく匂ってくるようにたく香。

と解説してある。ここは忠こそを招いた仲忠が、「空薫物」をして接待しているところである。『枕草子』四十三段「にげなきもの」にも、「空薫物にしみたる几帳」（101頁）と出ている。いつも「香」を焚いていると、調度品にも「香」の薫りが染み付くのである。

『源氏物語』若紫巻にも、

そらだきもの心にくくかをり出で、名香の香など匂ひ満ちたるに、（211頁）

とあった。また蛍巻にも同様に、

いといたう心して、そらだきもの心にくきほどに匂はして、（198頁）

と、源氏が玉蔓の部屋の「空薫物」を演出している。注目したいのは、蛍巻にも若紫巻同様、「心にくき」とあることだ。『枕草子』一九〇段「心にくきもの」にも、「薫物の香、いと心にくし」（332頁）とあった。どうやら「心にくし」は、「空薫物」「薫物」とも深く関わる用語のようである。

「空薫物」の例は『栄花物語』にも認められる。かがやく藤壺巻では一条帝が彰子のいる藤壺へいらっしゃったところ、

この御方の匂ひは、ただ今あるそら薫物ならねば、もしは何くれの香の香にこそあんなれ、なんともかかえず、何ともなくしみ薫らせ、渡らせたまひての御移り香は他御方々に似ず思されけり。（305頁）

と「空薫物」が匂っており、その薫りが帝の衣装に「移り香」として染みている。わざわざ「薫衣香」を使わなくても、「空薫物」でも衣装に「香」を焚き染めることができるのだ。

一方、『源氏物語』花宴巻には、

そらだきものいとけぶたうくゆりて、衣の音などいとはなやかにふるまひなして、心にくく奥まりたるけはひは立ち

おくれ、　（365頁）

とあって、過剰にくゆらせている右大臣家の「空薫物」は、かえって無風流に思われている。それは女三宮も同様で、出家した女三の宮の持仏開眼供養の折、

火取りどもあまたして、けぶたきまであふぎ散らせば、

（梅枝巻375頁）

とやはり過剰に焚かれている。それについて光源氏は、

空に焚くは、いづくの煙ぞと思ひわかれぬこそよけれ、富士の峰よりもけにくゆり満ち出でたるは、本意なきわざなり。　（375頁）

と批判している（過ぎたるは猶及ばざるが如し）。金にあかせて大量に焚けばいいというものではなく、「心にく」くなければならないのだ。ここに出ている「くゆる」も薫物に縁のある言葉である。『栄花物語』歌合巻では、藤原頼通が彰子（女院）一行を接待しているが、

殿、内より御火取持ちておはしまして、空薫物せさせたまひて、添ひおはします。　（240頁）

にしても、露骨すぎてもはや「空薫物」とはいえそうもない。

以上のように、平安文学における「空薫物」は、単に経済力の豊かさを見せつけるだけではなく、焚く側の教養や高尚さが問われる「心にく」いものだったのだ。まさにみやびの世界を具現する小道具だといえる。必然的にそれを嗅ぐ側の能力も試されることになる。

五、『源氏物語』の「移り香」―感染する薫り―

次に「移り香」について見てみたい。これは衣装に焚き染められた「香」の匂いが、誰かと接触することで相手の衣装に移る（感染する）という意味である。人と人とが直接接触するので、大抵は男女の交わりということになる。その意味では、官能的なニュアンスも内包している。

「移り香」の初出は『古今集』で、上代の『万葉集』には出ていない。やはり「練香」が普及し、「薫衣香」が一般化した後でないと出てこないのだろう。ただし『古今集』では、紀友則と友人（男同士）の間で交わされている。

蝉の羽に夜の衣はうすけれど移り香こくもにほひぬるかな

（八七六番）

これは男女の仲のように、あなたの貸してくれた夜着の「移り香」が濃かったので、私の衣装にもいい薫りが匂っていま

す、と見立てて遊んでいる（疑似恋愛）。留意すべきは、『古今集』にもこの一例しかなく、その後もほとんど用いられていないことである。それが『源氏物語』では突然十五例も使われている。ということで、現在の「移り香」のイメージは、『源氏物語』によって恋物語の小道具として醸成されたといえそうだ(8)。

例えば若紫巻では、光源氏に抱かれたことで、紫の上の衣装に光源氏の「移り香」が染みていた。また光源氏が斎宮女御と対面した際に座った敷物にも「移り香」が染みており、それを女房達は、

この御褥の移り香、言ひ知らぬものかな。（薄雲巻463頁）

と賛美している。これが感染する「移り香」である。続編の主人公である薫の「移り香」は強烈なもので、薫に抱かれた宇治の大君が妹中の君の寝所に戻ってくると、大君の体からは、

ところせき御移り香のまぎるべくもあらずくゆりかをる。（総角巻241頁）

と、薫の「移り香」が薫ってくる。それによって中の君は、大君が薫に抱かれたことを想像する。

こうして見ると、男性はお目当ての女性に逢いに行く際に、衣装に「香」を焚き染めていたことがわかる。ただし真木柱巻の髭黒大将など、やっと手に入れた玉鬘に逢うための準備は自分でやっておらず、北の方にやらせていた。

御火取り召して、いよいよたきしめさせたてまつりたまふ。（364頁）

そのため嫉妬に狂った北の方は、その「火取り」の灰を髭黒の頭からかけてしまう。これなどは滑稽な例といえよう。

もちろん女性の衣装にも「香」は焚き染められている。常夏巻の近江の君の場合、

いとあまえたる薫物の香を、かへすがへすたきしめゐたまへり。（251頁）

とある。ところでこれは褒めているのだろうか、貶（けな）しているのだろうか。決め手は「あまえたる」である。「練香」は粉にした「香」を蜂蜜などで練って丸めたものである。蜂蜜の量が多いと甘くなる。ただしそれは下品な薫りとされており、近江の君は貶されていることになる。それに対して鈴虫巻で光源氏の用意した「香」は、

荷葉の方を合はせたる名香、蜜をかくしほほろげて焚き匂はしたる、（374頁）

と、蜜を少なめにした上品なものであった。「ほほろぐ」はばらばらにすることである。

『源氏物語』の「移り香」は、登場人物の嗅覚能力や調合能力が試されるだけでなく、男女間の悲喜劇の小道具としても機能していたのである。もちろん読者の教養もこっそり試されていた。

六、『源氏物語』の「かうばし」

「栴檀（せんだん）は二葉よりかんばし」ということわざがある。この「かんばし」は「かうばし」が撥音便化したものである。漢字では「香ばし」「芳ばし」の字を当てている。その出発点は「かぐはし」だとされている。例えば『万葉集』に、

・ほととぎす来鳴く五月に咲きにほふ花橘のかぐはしき
（四一六九番）

・梅の花香をかぐはしみ遠けども心もしのに君をしぞ思ふ
（四五〇〇番）

など、芳香のある橘と梅の花が「かぐはし」で形容されていた。

ところが神楽歌に、

榊葉の香をかぐはしみとめ来れば八十氏人ぞ円居せりける
（拾遺集一七五八番）

とあって、「榊」も「かぐはし」とされている。しかしながら「榊」（真榊）にはほとんど香りがない。そのためこの「榊」は「櫁（しきみ）」（樒）のことかとされている。いずれにしても上代の「かぐはし」の用例はすべて植物の薫りであって、加工された「香」の例はない。

平安時代になると「かぐはし」が減少し、代わってそれがウ音便化した「かうばし」が浮上する中で、「香」の用例がたくさん出てくる。もちろん「かぐはし」にしても『うつほ物語』国譲中巻に、

蓬莱の山の下の亀の腹には、香ぐはしき裛衣を入れたり。
（156頁）

などとある。この「裛衣」は「裛衣香（えいこう）」（原料は栴檀）という「香」である。それと並行して『大和物語』九一段に、

色などもいときよらなる扇の、香などもいとかうばしうておこせたり。
（314頁）

とあるのをはじめとして、『枕草子』「心ときめきするもの」にも、

よき薫物たきて、一人臥したる。〈中略〉香ばしうしみたる衣など着たる。（69頁）

と「かうばし」の例が見られる。

『源氏物語』など「かうばし」の用例が二十六例も用いられている。しかも、

・昔の薫衣香（くのえかう）のいとかうばしき一壺具してたまふ。（蓬生巻341頁）

・名香のいとかうばしく匂ひて、榲（しきみ）のいとはなやかに薫れるけはひも、（総角巻236頁）

などと香の「かうばし」さについて述べられていたり、また衣装に焚き染められた、

・表着（うはぎ）には黒貂（ふるき）の皮衣（かはぎぬ）、いときよらにかうばしきを着たまへり。（末摘花巻156頁）

・いと若ううつくしげなる女の、白き綾の衣一襲、紅の袴ぞ着たる、香はいみじうかうばしくて、あてなるけはひ限りなし。（手習巻286頁）

などの例もある（和紙の用例もある）。

中でも登場人物に付与された薫りとして、薫の「かうばし」さは、

香のかうばしさぞ、この世の匂ひならず、あやしきまで、うちふるまひたまへるあたり、遠く隔たるほどの追風も、まことに百歩の外も薫りぬべき心地しける。（匂宮巻27頁）

とあって、人工的に調合した「香」ではなく、生まれながらに自らの体臭（人香）が芳香を放っている。そういった薫の薫りに対抗心を燃やす匂宮にしても、

・袿姿（うちき）なる男の、いとかうばしくて添ひ臥したまへるを、（東屋巻63頁）

・夜深き露にしめりたる御香のかうばしさなど、たとへむ方なし。（浮舟巻192頁）

と、「かうばし」で形容されている。続編は〈嗅覚の物語〉ともいえそうだ。

光源氏にしても、闇に紛れて空蟬の寝所に忍び込むが、

かかるけはひのいとかうばしくうち匂ふに、（空蟬巻124頁）

と、その「かうばし」い薫りで空蟬に気づかれ、逃げられてしまった。息子の夕霧にしても、落葉宮への懸想を律師に見咎められ、

いとかうばしき香の満ちて頭痛きまでありつれば、げにさなりけりと思ひあはせはべりぬる。常にいとかうばしうも

のしたまふ君なり。　（夕霧巻417頁）

と語っている。ただし夕霧についてはほとんど薫りに言及されていないので、ここには律師の思い込みや誇張も含まれている。「頭痛きまで」というのは滑稽でさえある。こうしてみると光源氏の一族（男性）には、特徴的に「かうばし」が付与されているといえそうだ。

もちろん「かうばし」は薫物だけに用いられるわけではないが、『源氏物語』では「かうばしき香」「香のかうばしき」に用例が集中しており、〈薫物の美意識〉として特化されている(9)。

七、嗅覚の「なつかし」

「なつかし」と嗅覚との関連について、一般の古語辞典では言及されていない。しかしながら「香」と「なつかし」は思った以上に密接に結びついている。例えば『万葉集』の、

霞立つ長き春日をかざせれどいやなつかしき梅の花かも　（一四二八番）

や『古今集』所収の、

春雨に匂へる色も飽かなくに香さへなつかし山吹の花　（一二二番）

歌があげられるし、他にも勅撰集の中に、

五月雨の空なつかしく匂ふかな花橘に風や吹くらむ　（『後拾遺集』二一四番）

吹きくれば香をなつかしみ梅の花散らさぬほどの春風もがな　（『詞花集』九番）

女郎花なびくを見れば秋風の吹きくるすゑもなつかしきかな　（『千載集』二五二番）

など、少ないながらも嗅覚に関わる「なつかし」が詠じられている。

『源氏物語』花散里巻にも、

橘の香をなつかしみほととぎす花散る里をたづねてぞとふ　（156頁）

とあるが、これらはすべて植物の花を詠じた歌であった。もちろん「なつかし」は、人工的な薫物とも結びついている。梅枝巻の「薫物合せ」では、源氏が調合した「侍従」について兵部卿宮は、

侍従は、大臣の御は、すぐれてなまめかしうなつかしき香なりと定めたまふ。　（梅枝巻409頁）

と判定している。また花散里の調合した「荷葉」についても、

さま変り、しめやかなる香して、あはれになつかし。

（梅枝巻409頁）

と評価している。

嗅覚の「なつかし」であるから、必然的に「かうばし」という言葉とも共起している。古い例としては『うつほ物語』に、

麝香の臍半らほどばかり入れたり。取う出て香を試みたまへば、いとなつかしく香ばしきものの、例に似ず。

（新編全集国譲中巻160頁）

とあって、麝香の強烈な匂いを「なつかしく香ばしき」と表現している。『源氏物語』には、

・いとかうばしくてらうたげにうちなくもなつかしく思ひよそへらるるぞ、すきずきしや。（若菜下巻142頁）

・御髪をかきやるに、さとうち匂ひたる、ただありしながらの匂ひになつかしうかうばしきも、（総角巻329頁）

などの例がある。前の例は女三の宮の飼っていた唐猫のことで、この場合の「かうばし」は猫の匂いではなく、女三の宮の「移り香」が付着しているのだろう。後の例は、亡くなった大君の髪から匂ってきた生前と変わらぬ大君の薫りであった。『宇治拾遺物語』にも、

帝近く召して御覧ずるに、けはひ、姿、みめ有様、香ばしく懐かしき事限なし。（新編全集221頁）

とある。「なつかし」は、「かうばし」と関連のある嗅覚表現だったのだ。

そうなると女三の宮の猫のように、「移り香」と「なつかし」の関わりが認められる。『源氏物語』には夕顔巻の扇について、

もて馴らしたる移り香いとしみ深うなつかしくて、

（夕顔巻113頁）

とあった。夕顔物語を引用している『狭衣物語』の飛鳥井の女君にも、

ただ一夜持たせたまへりしなりけり。移り香のなつかしさは、ただ袖うちかはしたまひたりし匂ひに変らず、

（新編全集巻一140頁）

という例がある。これは道成に連れ出された飛鳥井の女君が、狭衣の扇に残る「移り香」を嗅いでいるところである。またそれ以外にも、

薄鈍なる御扇のあるを、せちにおよびて取らせたまへれば、懐しき移り香ばかり昔に変らぬ心地するに、

（巻四224頁）

という例もある。これは女二の宮の「移り香」の付いた扇を狭衣が手にしている場面であり、三例とも扇の「移り香」だった。

同じく後期物語の『夜の寝覚』にも、

我が身にしめたる母君のうつり香、紛るべうもあらず、さとにほひたる、なつかしさまさりて、（新編全集巻四324頁）

と見えている。これはまさこ君に付着していた母（寝覚の上）の「移り香」である。さらに『浜松中納言物語』にも、

琴ひき寄せたれば、つねに弾きならし給ひける人の、移り香なつかしうしみて、調べられたりけるを、

（新編全集巻三284頁）

と出ている。中納言が吉野の姫君の琴を弾き寄せた際、姫君の「移り香」が琴に染みて薫っていたという例である。

以上のように「なつかし」は、「かうばし」や「移り香」と合わせて親しみの感情を表わしていた。嗅覚的な「なつかし」は、『源氏物語』によって方法化・深化された美的言葉と言ってよさそうである(10)。

第三部

八、薫物の縁語

―籠・火取り・焦がる・焚く・染む・くゆる―

『堤中納言物語』中の「このついで」には、宰相中将の話の中に、

こだにかくあくがれ出でば薫物のひとりやいとど思ひこがれむ

（399頁）

という歌が引用されている。この歌には掛詞や薫物の縁語が複数用いられている。「こ」には「子供」と「火取り」の「籠」が、そして「ひとり」には「一人（独り）」と「火取り」が掛けられている。さらに「火取り」・「思ひ（火）」・「焦がれ」はすべて薫物の縁語である。

また「籠」については、『蜻蛉日記』の長歌に「思ひし出では薫物のこのめばかりは」（119頁）とあって、これも「こ」に「籠」と「此の」が掛けられている。次に「ひとり」に関しては、『源氏物語』真木柱巻で髭黒の召人である木工の君が、

独りゐてこがるる胸の苦しきに思ひあまれる炎とぞ見し

（368頁）

という歌を詠じている。この「独り」にも「火取り」が掛けられているし、「こがるる」「思ひ」「炎」が「火取り」の縁語になっている。「火取り」（香炉）は薫物に付き物であり、また掛詞になるということで、歌語として多用されている。『大和物語』一三五段では三条右大臣の娘が、

たき物のくゆる心はありしかどひとりはたえて寝られざりけり

という歌を詠んでいる。「火取り」は「独り」の掛詞になることで、非恋の歌として詠まれることが多い。

そもそも「焚く」は「焼く」に比べて「火」というか「炎」が少ないので、室内でも使用された。それもあって恋歌への使用が多かった。同じく「くゆる」も、火が出ないでくすぶることである。その分、煙を伴うわけだが、それも含めて薫物に縁のある言葉といえる。そこから「焚きしむ」も連想される。『枕草子』二一五段など、

よくたきしめたる薫物の、昨日、一昨日、今日などは忘れたるに、引きあけたるに、煙の残りたるは、ただ今の香よりもめでたし。

（214頁）

と出ている。本来「染む」は色に染まることだが、薫物と一緒に使われることで、薫りが衣装や紙に沁み込む意味で多用されている。

「くゆる」については『大和物語』一七一段に、

・人知れぬ心のうちにもゆる火は煙もただでくゆりこそすれ
・富士の嶺の絶えぬ思ひもあるものをくゆるはつらき心なりけり

（414頁）

という贈答があるように、「燻（くゆ）る」と「悔ゆる」が掛けられることで、やはり恋歌に用いられることが多い。

もう一つ、薫物に縁のある言葉として「かがゆ」「かがふ」あるいは「かがへる」という珍しい言葉がある。例えば『枕草子』二一四段には、放置されていた菖蒲について、

引き折りあけたるに、そのをりの香の残りてかかへたる、いみじうをかし。

（214頁）

とある。この「かかへたる」については新編全集の頭注一一に、

「かかふ」は香が匂う意。一説、『枕草子』の例はすべて連用形で「かかへ」と表記されているが、下二段動詞「香がえ」（「嗅ぎ」に「ゆ」が添った形）の仮名遣いの誤りとす

る。

と説明されている。用例が少ないこともあって活用も定まっていないものの、意味は薫りが漂うことなので、「香」あるいは「嗅ぐ」から派生したものと考えられている。

九、平中と本院侍従の話に登場する「黒方」

平中こと平定文（たいらのさだふみ）は、在原業平に並ぶ好き者で、『平中物語』という歌物語の主人公としてよく知られている。業平との違いは、和歌の数が少ないこと、そして好色な失敗譚が多いことだろうか。ただしここに紹介する『今昔物語集』巻三〇第一話は、『平中物語』にはない話なので、後人が増補したものだと思われる。

平中は本院大臣（藤原時平）の邸に仕えていた侍従という若くて聡明な女房に懸想した。しかし侍従はなかなか平中に靡かない。恋文を出しても返事もくれない。せめて手紙を「見た」とだけでも返事してほしいと懇願したところ、侍従から「見た」とだけある返事が届けられた。しかもそれは自筆ではなく、平中の手紙にあった「見つ」を切り取って張り付けたものだった。

ある大雨の暗い夜、こんな日に訪ねていけば心を動かされるに違いないと思ってやってきたところ、仕事が済むまでしばらく待ってとのこと。喜んで待っていると、中から戸の掛け金がはずされた。中に入ると寝床が敷いてあって、女性が横になっている。喜んで近づいたところ、女性は障子の掛け金を掛け忘れたので掛けてくるといって出ていった。すぐ戻るだろうと思って待っていたが、女は戻ってこない。妙だと思って障子のところへ行ってみると、障子は向こう側から掛け金が掛けられていた。平中は侍従に騙されたのだ。

さすがの平中も侍従への懸想をあきらめ、むしろ侍従のことを嫌いになるためにはどうすればいいかを考えた。そこで奇妙なことを思いついた。たとえどんな美女でも、排泄物を見れば恋も冷めるに違いない。これはスカトロジーと称されている。早速、お丸の世話をする女童から箱を奪い取り、中をのぞいてみたところ、なんともいい薫りがするではないか。箱の中を見ると、小水に似せた液体と、親指ほどの大きさのものが三つ入っていた。変だと思って木の枝に刺して匂いを嗅いでみると、「黒方」の薫りがする。そこで液体を舐めてみたところ、それは「丁子」の煮汁だった。枝に刺したものは「香」に山芋と

甘葛（あまづら）をまぜてこしらえた「練香」だった。すべては侍従が平中の行動を予想して用意しておいたのだ。まさかこんなところに「黒方」が使われるなんて、思いもつかなかった(11)。

この一件によって、平中は侍従を思いきるどころか、ますます恋焦がれてしまった。そのため平中は病の床につき、悩み続けた挙句に亡くなってしまう。増補された説話とはいえ見事な出来である。なおこの話は、芥川龍之介も見過ごさず、『好色』という短編に仕立てている。芥川だけではない、谷崎潤一郎も『少将滋幹の母』のみならず、『乱菊物語』・『墨塗平中』にもこの平中説話を取り入れている。それほどインパクトのある話だったのだ。

（注）歴史上の本院侍従は歌人として知られており、藤原兼通とのやりとりを記した『本院侍従集』という歌集を残している。ただし平中の本院侍従とは時代がずれており、別人とされている。

十、土中に埋められた「練香」

「練香」は、熟成発酵させるために一定期間土中に埋められたとされている。その例として、『堤中納言物語』中の「このついで」にある、

東の対の紅梅の下に埋ませたまひし薫物、（397頁）

が引用されている。確かにこれを見ると、「練香」を紅梅の根元に埋めていたことが読み取れる。それもあって『紫式部日記』寛弘五年九月九日条にある、

御火取りに、ひと日のたきものとうでて、こころみさせたまふ。（129頁）

にしても、「とうでて」（取り出して）は「このついで」同様に解釈されている。これは八月二十六日に作った「練香」を土中に埋め、九月九日に取り出したということなのだろう（十日以上埋めていた計算になる）。

『源氏物語』梅枝巻でも、源氏は、

かのわが御二種のは、今ぞ取う出させたまふ。右近の陣の御溝水のほとりになずらへて、西の渡殿の下より出づる、汀近う埋ませたまへるを、惟光の宰相の子の兵衛尉掘りてまゐれり。（408頁）

と、「練香」を西の渡殿の下の遣水の辺に埋めておいたとある。「右近の陣の御溝水のほとりになずらへ」というのは、宮中の右近の陣近くの遣水の辺に埋めるという旧例にならってのこと

である。その旧例というのは、『河海抄』によると、

承和御時右近陣の御溝の辺の地にうづまる。後代相伝して其所をたがへず云々。

とあって、仁明天皇の時代に行われたものが慣例化していったことになっている。また梅枝巻には「承和の御いましめ」ともあり、「練香」に関しては仁明朝がポイントになっていることが察せられる。

「練香」を土中に埋めることについては、『薫集類抄』にも「百歩香」について、

盛瓶中経三七日取焼。百歩外聞香。

とあって、二十一日間埋めると百歩を越えて薫るとある。また「黒方」や「侍従」については、

黒方侍従春秋五日夏三日冬七日埋之梅樹下。

と書かれている。季節によって埋める日数に違いがあるようだ。ただし右近の陣の遣水の辺や紅梅の根元に埋めることの効果は懐疑的で、それによってどれほど「練香」が醸成されるのかの根拠は示されていない。むしろ室町以降、悪しき風習として廃止されている。

第四部

十一、『源氏物語』梅枝巻の「薫物合せ」

―王者の遊び―

「香」には「六種香」「空薫物」「薫衣香」「組香」「源氏香」など、いくつかの用語がある。その中で、ここでは総体的な「薫物合せ」について考えてみたい。

まず「薫物合せ」を『日本国語大辞典』で調べてみると、

各人が秘密に調合した練香を持ち寄ってたき、判者が優劣を判定する平安時代の宮廷遊戯。香合。

と出ていた。最初は遊びとしての「玩香」だったのだろう。それが醍醐天皇の頃から、宮中で物合せの一種として行われるようになったというわけである。

辞書の説明は間違ってはいないのだが、代表的な『源氏物語』梅枝巻の「薫物合せ」は少々違っている。というのも光源氏主催の「薫物合せ」は宮廷遊戯ではなく、あくまで個人的なものだからである。光源氏は明石姫君の裳着と東宮入内に合わせて、優雅な「薫物合せ」を企画した。そこで朝顔斎院・紫の上・花散里・明石の君に秘蔵の「香」を配り、それぞれ二種類

の「練香」の提出を求めている。「持ち寄って」とあるが、実際には光源氏に依頼されて調合して送っており、「薫物合せ」の場に女性たちが集っているわけではない。

ここでは四人の女性に加え、光源氏も自身で調合したものを出している。その上で弟の蛍兵部卿宮を判者として、それぞれの薫物を評価させている。しかしながら左右に分かれてはいないし、兵部卿宮にしてもきちんと優劣をつけておらず、光源氏から「心ぎたなき判者なめり」（410頁）と批判されている。どうやら「薫物合せ」は「歌合」の流れとは違ってるようである。それでも兵部卿宮は、「黒方」は朝顔斎院が調合したもの、「侍従」は光源氏の調合したもの、「梅花」（春）は紫の上のもの、「荷葉」（夏）は花散里のもの、そして明石の君は「百歩香」をよしとしている。それはそれで一つの見識であろう。

また『紫式部日記』寛弘五年八月二十六日条に、

御薫物あはせはてて、人々にもくばらせたまふ。まろがしゐたる人々、あまたつどひゐたり。（128頁）

とあって、それを受けて九月九日条に、

御火取りに、ひと日のたきものとうでて、こころみさせたまふ。（129頁）

と出ている。こちらは一見、宮廷遊戯のように見えるが、この「薫物あはせ」は動詞で、大勢の女房達が「合せ薫物（練香）」を作ったことを意味している。ここでも遊戯としての「香合せ」は開催されていない（『栄花物語』はつはな巻の記事も同じ）。

ついでながら梅枝巻には、「練香」の歴史にかかわる重要な記述がある。まず光源氏は「承和の御いましめの二つの方」（404頁）といっているが、これは仁明天皇によって「黒方」と「侍従」の調合法は男子に伝授してはならないという戒めのことである。次に紫の上は「八条の式部卿の御方を伝へ」（同頁）とあって、本康親王（仁明天皇第七皇子）の調合法を伝授されていたことになっている。さらに明石の君については、

薫衣香の方のすぐれたるは、前の朱雀院のをうつさせたまひて、公忠朝臣の、ことに選び仕うまつれりし百歩の方、（409頁）

とあって、宇多院（前の朱雀院）・源公忠（合せ薫物の名手）という実名まであがっている。公忠は母の内侍（滋野直子）が「香」の秘伝を継承していたようで、その母から伝授されたのであろう。ただしこれらを資料で確認することはできそうもな

い。あくまで『源氏物語』にそう書かれているというだけのことなので、これをそのまま信じるのは危険である。

ここで調合された「練香」は、明石姫君が入内の際に持参するためのもの（嫁入り道具）だった。後宮の生活にはこれくらいの上質の「香」が必要だったのだろうか。という以上に、物語は実名（歴史性）をあげること、あるいは蛍兵部卿宮に評価してもらうことで、源氏の所有する「練香」が聖代から継承されたものであることを主張しているように読める。これは源氏の文化的戦略（政治の道具）でもあり、これによって明石姫君による後宮掌握を暗示しているのではないだろうか。こうしてみると紫式部は、「香」についての見識もかなりあったようだ。

なお足利義政の時代（文明十年）に書かれた邦高親王（後崇光院の孫）の『五月雨日記』の中に、「六種薫物合」の記録が見られる。これは主催者が親王ということで、かろうじて平安朝的なものが継承されているようである。ただし提出された「香」の銘は、

左　夏衣　夏衣春におくれて咲く花の香をだににほへ同じかたみに（藤原家隆）

右　松風　住吉の里のあたりに梅咲けば松風かをる春の曙（慈円）

と、新古今時代の歌を出典として名付けられている点、やはり平安時代そのままではなかった。というより、平安時代の薫物の実態は謎に満ちている。

十二、季節の「薫物」の謎

『源氏物語』の「香」を考えていて、一番すっきりしないのは、四季それぞれの「香」の使い分けが、人物固有の「香」にも及んでいるかどうかである。六種香の説明を見ると、

春　梅花　梅の花の香り　　夏　荷葉　蓮の花の香り

秋　菊花　菊の花の香り　　冬　落葉　紅葉の散る香り

とある。残りの二つについては無季（季節を問わない）とする説と、

侍従　秋　哀れを感じる香り　　黒方　冬　懐かしい香り

とする説があるが、短い説明から具体的な季節感は伝わってこない。しかも秋・冬は二種類あって、春・夏は一種類というのはバランスが悪いのではないだろうか。

それはそれとして、これを基本にして各自が独自の「香」を調合したとすると、それは年中変わらないもの（一種類）なの

だろうか。それとも四季（少なくとも夏冬二回）それぞれに独自の「香」（二種類以上）を配合して使い分けているのだろうか。その点が理解できないでいる。例えば「梅花」を調べると、梅枝巻の「薫物合せ」で紫の上の配合した「梅花」が評価されているが、「梅花」の用例はこれだけなので、普段の生活の中で紫の上がどの「香」を焚いていたのかはわからない。春に焚くのはともかく、残りの夏秋冬はどうだったのだろうか。また夏の町に住む花散里が調合した「荷葉」は、鈴虫巻でも夏に焚かれているので、季節にマッチしていることがわかる。もちろんそれは人物固有のものではなく、公的な儀式において焚かれたものだった。では花散里は、夏以外の「香」はどうしていたのだろうか。

「菊花」「落葉」に至っては、『源氏物語』にも登場していない。秋という季節は描かれているのに、季節の「香」として機能させられていないのである。それに代わって「侍従」「黒方」が用いられている。「黒方」は賢木巻で確かに冬に用いられていた。「侍従」はやや特殊で、初音巻では正月を迎えた六条院の冬の町で、明石の君が「侍従」を焚いている。そのまま見ると季節外れになるが、この場合はかつて明石巻において明石の君が岡辺の家で使っていた「香」だったと読める。光源氏にその頃のことを嗅覚によって想起させる小道具の一つとして、あえて（意図的に）焚かれたものだったのだ。そうなると必ずしも季節に束縛されるものではないことになる。

参考のため、『天徳内裏歌合』を例にすると、左方は赤色で「黒方」を焚き、右方は青色で「侍従」を焚いている。歌合では対立する「香」としての役割を担わされていることがわかる。ただしこの歌合は三月三十日に開催されているので、「黒方・侍従」では季節が合わない。こうしてみると、公使に関わらず、季節との密接な関わりはあまり考慮されていないことがわかる。むしろ季節を超えて、「侍従」や「黒方」は無季として使われていたのではないだろうか。薫の強烈な体臭など、季節によって匂いが変化するとは書かれていないので、季節の使い分けという点は再考の余地がありそうだ。

結局、光源氏や薫が季節ごとに独自の「香」を使い分けているのかどうか、資料不足でよくわからないというか、詳しく描かれていないというしかない。『うつほ物語』では「黒方」がほとんどだったし、逆に『枕草子』など「香」の名前すら出ていない。清少納言の嗅覚能力は案外低かったのだろうか。

こうして見ると、六種香を無理に季節に当てはめたのは、後世の人々のさかしらなのではないだろうか。もしそうなら、それを『源氏物語』に戻して考えるというのでは、本末転倒になってしまうし、解釈を誤ってしまう恐れがある。それ以上に『源氏物語』に幻惑されている恐れもある。

十三、「合せ薫物」について

『栄花物語』月の宴巻には、次のような奇妙な歌がある。

逢坂もはてはゆききの関もゐずたづねて訪ひこ来なば帰さじ

村上天皇が後宮の女性たちにこの歌を送ったところ、ほとんどの人は歌の真意がわからず、頓珍漢な返事を寄こした。唯一、広幡の御息所（計子）だけが何もいわずに「薫物」を届けてきた。さてこの歌の意味が分かるだろうか。

実は歌の意味は単純で、あなたとの仲を妨げる関守はいないので、どうぞ私を訪ねて来てください。来てくれたら返しませんよというものである。平安時代は通い婚なので、男性が女性の家を訪ねるものだが、後宮だけは別で、女性の方が帝のもとを訪れることもあった。しかしそんなことが問題なのではない。帝の真意は歌の内容ではなく、歌の技法にあったからである。「折句」という技法をご存じだろうか。『伊勢物語』第九段の「かきつばた」を句の頭に詠みこんだ歌は「冠歌」であった。この歌は冠だけでなく末も使って「あはせたきものすこし」と十文字が詠みこまれており、これを「沓冠折句」と称している。

要するに村上天皇は、後宮の女性たちに「合せ薫物を少し下さい」と依頼したのである。しかしながらほとんどの女性は歌の技法がわからなかった。広幡の御息所だけはそれを察して「薫物」を送っているのだから、その教養の高さが際立っている。「薫物」は朱雀・村上天皇の時代に急速に発達したとされているので、こんな説話が残っているのだろう。

優雅な「薫物」となると、どうしても『源氏物語』を例にしたくなるが、『源氏物語』に描かれているものが当時の一般例となることはほとんどない。何故なら、当たり前のことは書かれない作品だからである。『源氏物語』はむしろ特殊な例の方が多いと考えるべきである。「香」についてもそういう目で見た方がよさそうだ。

その上で「薫物」という言葉を検索すると、『源氏物語』に

十三例見つかった。『源氏物語』は長編なので、たいていの言葉は『源氏物語』が一番用例が多くて、他の作品は『源氏物語』よりずっと少ないものである。ところが「薫物」の場合、『うつほ物語』に二十例、『栄花物語』に十例あることがわかった。特に『うつほ物語』には「合せ薫物」の例がたくさん出ている。何と何を合わせたのか不明だが、これによって一種類の「香」よりも複合した「練香」の方が多かったことがわかる。しかも、

合はせ薫物を山の形に作りて、　（吹上上巻401頁）
合はせ薫物を島の形にし、　（吹上上巻413頁）
黒方を鶴の形にて、　（菊の宴巻49頁）

などとあって、「練香」で洲浜を作っていたこともわかった（「天徳内裏歌合」にも例がある）。こういったものは『源氏物語』には出てこない。

もう一つ、「練香」の中で「黒方」が気になったので調べてみたところ、『源氏物語』には二回しか使われていないのに、『うつほ物語』には十四例もあることがわかった。どうやら「黒方」は、六種香の中でも突出して使用頻度が高いようだ。当然、冬以外の使用例もたくさん認められる。こうなると「薫物」のことを考えるためには、『源氏物語』よりも『うつほ物語』の方が資料的価値が高そうに思えてきた。「かうばし」も含めて、こんな大事なことを、今まで見過ごしていたことを反省したい。

十四、「梅花香」の和歌

『万葉集』に薫物の歌は見当たらない。という以上に、『古事記』・『日本書紀』を含めた上代の文献に、具体的な薫物の記事は皆無に近いようだ。それだけでなく「かをり」という言葉もほとんど使われていない(12)。薫りは平安時代以降のもののようである。

「薫る」植物として、「橘と梅」が有名だが、その他に「菊・あやめ・桜・山吹・藤・藤袴」などもあげられる(13)。その中でも植物の「梅」の香りは多くの歌に詠まれていた。それに対して人工的な「梅花香」（練香）についての歌は、『古今集』になっても見かけない。それは「梅花香」だけでなく、他の薫物も同様なので、『古今集』の時代にはまだ「練香」が美的に発達していなかったのだろう。

そんな中、かろうじて藤原高光の歌に、以下のようなものが

あった。

比叡の山に住み侍ける頃、人の薫物（たきもの）を乞ひて侍りければ、侍りけるままに少しを梅の花のわづかに散り残りて侍る枝に付けて遣（つか）はしける　如覚法師

春過ぎて散りはてにける梅（り）の花ただ香ばかりぞ枝に残れる

（拾遺集一〇六三）

作者の「如覚」は高光の法名である。出家した高光が比叡（横川）で仏道修行しているところに、薫物を分けてほしいという連絡があった。そこで高光は手元にあった「梅花香」を、散り際の梅の枝に添えて送ったというのだ。歌の意味は、

春が過ぎて梅の花も残らず散ってしまったが、ただ香だけがわずかに枝に残っていることです。

というものである。「香ばかり」には「かばかり」（ほんのわずか）が掛けられている。これによって裏の意味に、お求めの薫物は「梅花香」を少しだけお贈りします、が込められているわけである。これは「梅花香」を美的に歌ったというより、「梅花香」に添えられた挨拶の歌だった。

高光の父は九条右大臣藤原師輔で、母は醍醐天皇皇女雅子内親王という高貴な生まれだった。才知があり、官位の昇進もスムーズで、将来を嘱望されていた。ところが高光二十歳頃、父師輔の死を契機として、妻子を捨てて突然出家してしまった。その経緯は『栄花物語』月の宴巻に詳しく述べられている。

この高光は、「三十六歌仙」の一人に選ばれているほどの歌の名手でもあった。出家した高光に薫物を所望しているのだから、高光は「練香」の調合にも長けていたのであろう。出家しても、あるいは出家したからこそ、「香」は生活に欠かせないものだったのかもしれない。「練香」を考える上で、この高光の歌は看過できそうもない。というより、「練香」に関する資料があまりにも少なすぎるといった方がいいのかもしれない。『薫集類抄』だけではどうにもならないのである。

〔注〕

（1）薫のパロディとして、『堤中納言物語』の「このついで」に登場する宰相中将も、

宰相中将こそ、参りたまふなれ。例の御にほひ、いとしるく。

（397頁）

と、視覚より先に嗅覚で特定されている。

（2）大津直子氏は、薫の移り香は中の君の腹帯に残っていた

という斬新な説を述べている（「『源氏物語』中の君の〈しるしの帯〉」國學院雑誌106―8・平成17年8月）。腹帯以外に髪でも可能かもしれない。

（3）宇治市立源氏物語ミュージアムのビデオでは、側近の女房が「薫りが違います」と口にするが、もはや間に合わなかった。

（4）それは「香」（芸道）だけでなく、衣装や建築物・調度品・言語にも及んでいる。私たちは江戸時代に時代考証されたものから平安時代を見ているので、その多くは到底平安時代まで遡れない。茶道にしても、『源氏物語』にお茶の用例はない。光源氏はお茶など飲んでいないのである。

（5）香木が流れ着いたことを記念して枯木神社が建てられている。また献上された朝廷では、聖徳太子がその香木で観音像と手箱を作ったという話も伝えられている（聖徳太子伝略）。

（6）名高い香木としては、正倉院（東大寺）所蔵の「蘭奢待」や細川家伝来の「白菊」などがある（伊達家では「柴舟」と命名されている）。

（7）『徒然草』は『枕草子』と比較されることが多いが、兼好法師は二条流歌道を修めた人なので、当然『源氏物語』を踏まえた記述もたくさんある。私など『徒然草』を『源氏物語』の注釈書と見ている。吉海直人「漂う香り「追風」」『源氏物語』「後朝の別れ」を読む』（笠間書院）平成28年12月参照。

（8）同じような言葉に「残り香」があるが、これは平安時代はおろか江戸時代まで使用例が見つからなかった。今のところ明治以降に使われた言葉ということになる。吉海直人「男性から女性への「移り香」」『『源氏物語』「後朝の別れ」を読む』（笠間書院）平成28年12月参照

（9）吉海直人「「かうばし」攷」『「垣間見」る源氏物語』（笠間書院）平成20年7月

（10）吉海直人「「なつかし」と結びつく香り」『『源氏物語』「後朝の別れ」を読む』（笠間書院）平成28年12月参照。

（11）あるいは「侍従」という女房名から薫物が連想されているのかもしれない。

（12）例外的に『万葉集』に一例あるが、「塩気のみかをれる国に」（一六二番）とあって、決していい薫りではない。また「香」にしても松茸の香（一二三三番）・橘の香（三

九一六番）・梅の香（四五〇〇番）のわずか三首しか詠まれていない。「梅」の歌はたくさんあるのに、嗅覚には関心が低かったようである。

(13) 新古今時代になると、「月光・風・枕・夢・雨」なども比喩的に「薫る」対象とされている。

〔参考文献〕

・宮川葉子氏「源氏物語「梅枝巻」の薫物について」青山語文13・昭和58年3月
・尾崎左永子氏『源氏の薫り』（朝日選書）平成4年5月
・藤原克己氏「薫の系譜」岡大国文論稿22・平成6年3月
・三田村雅子氏「方法としての〈香〉―移り香の宇治十帖へ―」『源氏物語感覚の論理』（有精堂）平成8年3月
・藤河家利昭氏「梅枝の巻の薫物合わせと仁明帝」広島女学院大学大学院言語文化論叢2・平成11年3月
・田中圭子氏「『源氏物語』の薫衣香―別れの香りとしての再考―」広島女学院大学大学院言語文化論叢4・平成13年3月
・森野正弘氏「源氏物語の薫物合せにおける季節と時間」山口国文26・平成15年3月
・三田村雅子・河添房江氏『薫りの源氏物語』（翰林書房）平成20年4月
・藤原克己氏「匂い」『源氏物語におう、よそおう、いのる』（ウェッジ）平成20年5月
・田中圭子氏「平安中期の歌人と薫物―源公忠と藤原公任を中心に―」広島女学院大学大学院言語文化論叢15・平成24年3月
・尾崎左永子氏『平安時代の薫香』（フレグランスジャーナル社）平成25年11月
・吉海直人「「かうばし」攷」『「垣間見」る源氏物語』（笠間書院）平成20年7月
・吉海直人「「なつかし」と結びつく香り」「男性から女性への「移り香」」「漂う香り「追風」」『『源氏物語』「後朝の別れ」を読む』（笠間書院）平成28年12月